

☒ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIを活用して、言語活動の過程におけるつまづきを可視化し、指導の個別化を図る授業開発

実証概要

<校数>1校(中学校:1校) <人数>480名(中学校:480名)

<学年>中学校:第1、2、3学年 <アプリ等> GELP(株式会社ベネッセコーポレーション)、ChatGPT(OpenAI)

<AI機能について>生徒の英語のレベルやつまづきにに応じた即時フィードバックを、Speaking/Writingの言語活動において提供。例)文法的なミスのリライトやモデル文の提示→音読によるパフォーマンス評価

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

【言語活動】領域:話すこと(発表) 活動:相手のプレゼンや説明を聞き、それに対して質問する

【単元設計の前提:「伝えたい!」の文脈づくり】

・単元末のパフォーマンス課題として「実際に外国人のプレゼンを聞いて質問する」場面を設定
→「英語を使いたい」「相手とコミュニケーションしたい」という必然性を先に作った上で本時の授業へつなげる

【授業の流れ】

①リスニング&メモ:登場人物のプレゼン・説明を聞きながら「何を質問したいか」の視点でメモ

②質問を考え・GELPで文字起こし:考えた質問をペアで共有→GELPで録音・文字起こし→個別フィードバック

③黒板での全体共有:「なぜその質問をしようと思ったか」をクラスでシェア

【教師とAIの役割分担】

・AI(GELP):表現面(語彙・文法・発音)の個別フィードバックを担当

・教師:③の共有場面で生徒の思考を整理・深化させる発問を担当→表現の精度はAI・思考と対話の質は教師

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

中1話すこと(CEFR)の変容



AIからのフィードバックをもとに、生徒が自己調整サイクルを1授業内で複数回回せたことが、英語力の向上につながったと考える。

②児童生徒の関心・意欲の変化

質問①「英語でのコミュニケーションにおいて、相手の状況や背景にも着目しながら聞こうとしている」

質問②「家庭学習でもAIを活用して学習している」

【分析結果】

・①・②ともに意欲が高い群において、「英語でコミュニケーションしたい」という意欲が事前比+20%上昇(60.5%)

→ AI活用の頻度だけでなく、相手意識を伴う学習観の高さがセットになることで、関心・意欲の向上に有意な差が生じることが示唆された

③教師の指導の変化

質問①「AIの活用により、個別指導に充てる時間が増加した」→100%の教員が肯定的な回答

【分析結果】

AI活用によりスローラーへの個別指導が可能になった。

また、従来は表現面の中間振り返りや個別の誤り修正に充てられていた全体指導の時間が、パフォーマンス課題の達成に向けて必要な思考のポイントを英語での言語活動を通して共有したり、思考を深める発問を行う場へと変化した。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

育成の目的:熊本県・市の英語教員全体にAI活用を普及させる人材を育成するため

- 研修会の開催: AI活用をテーマとした教員向け研修会を4回開催。参加者は延べ約100人。

- テレビ取材: 本校のAI活用が紹介され、テレビ放送とYouTubeで県外からも視聴。

- YouTubeで授業実践公開: 2026年1月時点で840回以上再生。

- 熊大附属中 研究発表会での公開授業: 「AIを活用した英語科の自己調整学習」をテーマに授業を公開。

- Instagramでの情報発信: SNSを通じたAI活用に関する情報発信を開始。

結果: 研修会では、参加者の約9割が「授業づくりや授業でAIを活用してみたい」と肯定的な回答

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

成果①AIによる学習過程の可視化を通じて、指導の個別化を実現

成果②学習者のレベル差を前提とした言語活動設計が可能に

成果③個別最適な学びが、実際の海外の外国人とのコミュニケーションの質の向上につながった

課題①個別化をさらに進めるためにAIによる評価と教師による評価のベストミックスの検討が必要

→令和8年度もAI(GELP)を活用しながら評価についての検証を行い、本校の研究発表会などで情報発信していく予定。